

メイベル・L・トッドの日本体験

梅 本 順 子

はじめに

本稿では、メイベル・L・トッド (Mabel L. Todd, 1856-1932, これ以降、夫のディヴィッドと区別するためにメイベルと呼ぶ) が著した記事をもとに、彼女が見た明治中期の日本を概観すると同時に、記事の背景にあるメイベルの活動を追う。日本で皆既日食観測を行うアマースト大学の観測隊のリーダーである夫に同伴して、メイベルは1887年と1896年の夏に二回来日した。それぞれ数か月という短期間の滞在ながら、その体験を記事にして発表した。

欧米人による日本関係の記事は、明治時代も中期になると、来訪者が増えるにつれて確実に増えてきていた。そのような中であっても、メイベルの記事は、闊達な行動に裏打ちされているだけに、読み応えがある。従来の規範にとらわれることなく、好奇心に突き動かされるかのように行動する背景には、自分の眼で何でも見よう、あるいは体験したいという強い意志が働いていた。社会と関わることを目標に、自立した行動をとる姿勢は、海外に出ても変わらなかった。特に二回目の来日では、皆既日食の直前まで夫とは別行動をとり、自分の目的に沿った活動に邁進した。

しかし、そんなメイベルも、夫の観測には必ず立ち会ってきた。メイベルの社会参加のやり方としては執筆、講演などいろいろあったものの、夫とともに行動することで社会と関わり続けたことが、彼女らしさを発揮する契機になったともいえるだろう。たとえば、帰国後、皆既日食の観測地であった北海道の枝幸に、千冊近くの蔵書を寄贈したことにも関わったこ

とだろう¹⁾。メイベルが枝幸滞在中、アイヌ部落訪問のため、足しげく周辺地域を回ることが出来たのは現地の人々の厚意による。また夫の観測においても多くの人々に支えられていたことを知っているだけに、その思いが形となることを望んだにちがいない。夫妻の書籍がもとになって枝幸に、北海道で初めての公立図書館が創設されることになったのである。進んで社会とつながり、自分のできることで社会参加を目指した先駆者としてのメイベルの片鱗がうかがわれる。

メイベルのプロフィール

メイベルの日本観に触れる前に、そのプロフィールについて簡単に紹介しておきたい。昨今メイベルに関する書籍²⁾が英米では出版されているものの、日本における知名度は決して高くない。メイベルの最大の業績は、エミリー・ディキンソン (Emily Dickinson, 1830-86, 後に紹介する兄のオースティンより先に死亡) という、生前は隠遁していた詩人を世に出したことである。多年にわたって書かれたものの、人目に触れることのなかったエミリーの詩を編集し、出版した最初の人物がメイベルなのである。しかし昨今出版された書物は、そんなメイベルの異なる側面をも浮き彫りにすることになった。自立した女性という印象が強いメイベルだが、そんなメイベルの背中を押したのは夫のみならず、交際相手の男性の影響も少なくなかった。

結婚後まもないトッド夫妻がマサチューセッツ州アマーフトにやってきたのは、夫のデイヴィッド (David P. Todd, 1855-1938) がアマーフト大学の天文学の講師の職を得たことによる。アマーフト大学の財務官を務める町の名士、オースティン・ディキンソン (Austin Dickinson, 1829-95 詩人のエミリー・ディキンソンの兄) の子供のピアノ教師として、ディキンソン一家と交流するようになったメイベルは、27歳年長のオースティンと、彼の死までの13年間、夫のデイヴィッドが黙認する形で、関係を続けた。エミリー

ーとその妹ラヴィニアはいずれも独身であったため、兄のオースティンの庇護のもと、オースティン一家の隣に住んでいた。この住宅をメイベルとオースティンは逢瀬の場所として使用したのだった。平静を装っていた二つの家族の間に亀裂が入るのは、オースティンが残した土地を巡って、ラヴィニアが土地の所有権を主張してメイベルを訴えたことによる。土地は、エミリーの残した詩を編集、出版した仕事に対する対価として、オースティンより遺贈されたと考えていたメイベルは、州最高裁まで争うが、結局敗訴が確定した³⁾。

これだけ述べると、不適切な関係を利用した女性という負のイメージが先行するかもしれない。しかしメイベルという人物は、女性という固定観念に縛られることなく様々な活動に積極的に参加していた。オースティンと関わることにより視野が広がり、彼の死後は独自の活動を活発化した。編集者としての仕事に加え、アマーストの歴史協会や Daughters of American Revolution (DAR) など女性を中心とした組織に関わりながら、多くの場所で多彩なテーマについてスピーチを行い、記事を書いてきた。20世紀にはいると環境保護運動にも参加して、開発業者から自然を守るために土地を購入したりもしている。いくらアメリカとはいえ、自立している女性が非常に少なかった時代に、いわゆる社会参画を目指し、その本領を發揮できたのは、持ち前の向上心や不屈の努力に加え、彼女が置かれた環境にあったといえるかもしれない。

その環境の一つが夫の仕事と考えられるだろう。天文学者の夫が海外で観測を行う際は、必ず同行しており、二度にわたる日本での皆既日食観測の折も一緒に来日した。当時の皆既日食観測が、国家を挙げてのプロジェクトであったことは、1896年当時、アメリカのアマースト隊のみならず、同じ枝幸にフランス隊、その南の地域には英国隊が待機していたことから明らかである。日食観測のためには、世界の果てであっても労を惜まないという風潮が当時はあったのだろう。そのような状況なので、同行で

きることを好機ととらえ、その機会を最大限に活かしたのがメイベルだった。これ以降、来日の折のメイベルの活動を追いながら、日本滞在中に何を見聞し、またそれをどのように発信したかを辿る。

最初の来日、福島県白河

夫が率いるアマースト大学の皆既日食観測隊の、日本における最初の観測地は、福島県の白河であった。現在、白河市の小峰城址に観測の碑が建立されている。この碑以外にも、何枚か写真が残っており、観測のための準備を行う一行の中にはメイベルの姿も映り込んでいる。あいにく、1887年8月19日の観測日、写真を撮るその三分間だけが陰ったとのことで、期待した写真の撮影には失敗した。しかし白河での観測後には、夫妻で富士登山を行っており、夫と連名で『センチュリー』誌に登山体験の記事を寄稿している。

メイベルの活躍は、むしろ観測後の富士登山(1887年9月4日~6日、須走口より)にあった。その記事「比類なき富士の登山」(“Ascent of Mt. Fuji, the Peerless”)は『センチュリー』誌の1992年8月号に掲載された。夫妻連名の作品ではあるが、その文章からは、彼女の手になることが多いと思われる。その記事の特徴について触れる。

まず夫妻の登山の目的は、科学者としての観測であり、日本の最高峰を極めたいという登山者の願望や、山頂の木花咲耶姫命を祀った神社参拝という信仰とは関係ないことを言明する。実際、観測機器などの機材を人足や馬を使って運ばせる様子が詳細に描かれている。しかし、巡礼者に関する描写(頂上の神社には、巡礼者らが残した一厘銭が積もっているようす)や、登るにつれ風が強くなると、「不信心のものに対して山が怒っているようだ」といった表現からは、日本人の慣習や信仰心などに関心があるメイベルが書いていると推察される。また、富士登山が、かつては外国人や女性には許されていなかったことにも触れており、富士登山の背景や

その歴史に迫る説明は、科学的な事実より、読者の興味をそそったことだろう。外国人女性としては、1867年、駐日英国公使パークス夫人が、夫や医師らと登ったものが最初とされ、その後登山者は増加したものの、外国人女性による体験記となると、当時はまだ珍しい時代であった。

二回目の来日、北海道枝幸

二回目の皆既日食の観測地は、北海道の北見地方の枝幸だった。1896年6月末に、アマースト大学の観測隊一行は、観測とは関係ない人々も乗船したコロネット号という大型ヨットで、二度目の来日を果たした。同年の4月4日にアマーストを発って、二か月半の旅程であり、途中ハワイのホノルルに二週間程度滞在している。ハワイでは、島嶼部に住む原住民の部落をメイベルは訪問していた。

枝幸での設営準備のために、時を移さずして7月初旬には現地入りした夫ほか観測隊一行とは別行動をとったメイベルは、観測とは関係のない人々と共に西日本を旅した。その後、8月9日の皆既日食の観測日に間に合うように北海道の枝幸に到着するため、友人らと別れたメイベルは、通訳一人を連れた旅を開始した。これは、英国人のイザベラ・バード (Isabella Bird, 1831-1904) の、通訳の青年一人を連れて行った旅を連想させるものだった。

メイベルの二回目の来日による、日本関係の記事は、帰国後まもなく『センチュリー』、『アトランテック』、『アウトルック』『ネーション』などの雑誌に発表されたのち、再編集されて、1898年に『皆既日食とコロネット号』 (*Corona and Coronet: Being a Narrative of the Amherst Eclipse Expedition to Japan, in Mr. James's Schooner-Yacht Coronet, to Observe the Sun's Total Obscuration 9th August, 1896*) として出版された。途中ハワイ諸島に立ち寄った時の出来事を含め、彼女が日本で体験したこと、ならびに見聞したことが、書籍のそれぞれの章となっており、前半がハワイ諸島編、後半が日本編となってい

る。

日本編は、時系列に従って、来日直後の印象から始まり、西日本で観光、そして単身北海道を目指した船旅と関わる出来事、並びに北海道でのアイヌ部落訪問とアイヌの人々、皆既日食観測に関わる活動からなっている。『皆既日食とコロネット号』の目次に従うと、北海道までの船上での出来事を中心にした「津波」(“The Tidal Wave”) (24章)、ならびに北海道でのアイヌ部落探訪を中心としたアイヌ関連の記事(25章~28章)、それぞれ “In Pursuit of a Shadow,” “Still Pursuing,” “Esashi in Kitami,” “In Ainu Land” が対象となる。

メイベルは、北海道では、寸暇を惜しんでアイヌ部落を探訪しており、これもまた、バードの活動に匹敵する。1878年7月、通訳一人を連れて単身北海道のアイヌ部落に分け入ったバードとは、訪問地や関心の範囲が異なるものの、いくつか共通する点も見られる。とくに、北海道で調査を行った経験を持つエドワード・S・モース (Edward S. Morse, 1838-1925) の依頼を受けて、アイヌの民具の収集を行うことがメイベルの目的の一つとなっていたことを記さなければならない。モースは、バードと同時期に日本に滞在し、バードが北海道を訪ねたのとほぼ同じころ北海道の南部を訪れていた。モースやバードが入ったのは北海道南部のアイヌ部落であったが、夫の観測地が北部の北見地方であったことから、メイベルが訪ねたのは、北見地方のアイヌ部落であった。バードが来た頃よりは20年ほどたっているというものの、枝幸に入るまでの長旅が示すように、北海道北部はアクセスがより困難な地域であった。それだけに稀有な体験をしたと、メイベルは自負する。先に触れたように、アイヌの民具など精神文化に関わるものを収集するという、明確な目的があったことはもちろんだが、日本人でもなかなか訪れることが困難な北海道北部のアイヌの文化に触れられるということで、いやがうえにもメイベルの期待は膨らんだ。

『皆既日食とコロネット号』の日本編は「日本再訪」(“Japan Revisited”) で

始まる。九年のときを経ても一見変わらないという印象をもった日本上陸だったが、来日直後一行が目にしたのは、明治三陸大津波（6月15日）の甚大な被害を伝える災害関係の記事であった。1896年の日本は、三陸地方に起こった大津波による災害の爪痕が生々しく残っていたのだ。メイベルは、アマースト皆既日食観測隊には自然の妨害がつきものだと述べた後、本州北部を襲った津波の被害の深刻さを詳細に語っている。アメリカ人読者に向けて、40年前にも起きていた安政の大地震とそれによる津波、磐梯山の噴火など、これまでに日本を襲った自然災害にも言及した。

すでに触れたように、西日本の旅行に三週間ほど時間を割いたメイベルは、観測日に間に合うように北海道の枝幸に到着するため、7月27日、通訳とともに横浜港で日本汽船の大連丸に乗船した。大連丸は函館を経由して小樽に入る定期船である。二日ほど札幌で過ごしたのち、北海道の西岸に行く定期船が少ないことから、小樽よりかんこう丸（漢字不明）という特別船を出してもらって、海路、北見枝幸を目指したのだ。これ以降、「津波」と「アイヌ関連の記事」という二つの視点から、メイベルの記事を追う。

「津波」の記事について

明治三陸大津波の被災地の沖合を航行した大連丸には、乗船客用に新聞雑誌が備え付けられていた。津波からひと月余りもたったものの、広域にわたって甚大な被害をもたらした津波とその被害に関する記事が大半を占めていた。この大連丸は、被災地への物資の供給を兼ねており、宮城県の荻ノ浜に一時停泊する。停泊地には目立った被害はなかったようだが、海に乗り出すと、メイベルらは三陸沖を漂流する遺体を目撃している。こういう現実と直面しながら、新聞雑誌の記事の内容を取り込んで、作品化したのが「津波」という作品だった。

メイベルの通訳をしたのは、愛知一中の前身の名古屋中学の教壇にたつ

教師の村上春太郎(1872-1947)だった⁴⁾。バードの通訳、伊藤鶴吉のように通訳を仕事としているわけではなかったが、メイベルの旅のガイドとしては適材だった。村上が在籍したことのある同志社理化学校は、創立者がアムースト大学出身の新島襄なので、その縁で通訳を引き受けることになったと考えられる。しかしそれだけでなく、村上自身が天文学に関心を持っていたことが大きかったのだろう。そのあたりは、「津波」の記事から明らかになる。

メイベルは、欧米で著名な天文学者の名前をあげて、村上の知識がどれほどのものかを試している。英語以外にも独仏語に堪能で、欧米の天文学や科学の雑誌に親しみ、その動向に通じていた村上は、教養の点では申し分なかった。また、村上を試そうとして取り上げた天文学関係の名前から、メイベル自身が天文学に精通していたことがうかがわれる。メイベルにしても村上にしても、この旅は互いに利するところが多かった。

メイベルが「津波」という記事で取り上げたエピソードは、災害の過酷な状況下で日本人が見せた自己犠牲などの美談が中心となった。メイベルの記事が、エリザ・シドモア(Eliza R. Scidmore, 1856-1928)などの欧米のジャーナリストの書いた関連記事(“The Recent Earthquake Wave on the Coast of Japan,” *National Geographic*, September, 1896)と似かよっているのは、記事の出どころが共通だからであろう。

例えば、釜石の電信局長が、家族のすべてが津波に流されたというのに、電信の復旧のために電信器機を探し出すことを優先し、外界との交信に尽力したこと、また津波の襲来で一時的に解放された雄勝の囚人が、津波の後には自主的に刑務所のある雄勝に戻ってきたことなどが書かれている。これらは、いくつかの新聞や雑誌がこぞって報道したものだ。メイベルは、記事の中で、災害下でも規範意識の高い日本人を描くだけでなく、科学者の妻として、地震が起こった地形についての説明、すなわち日本はいかに地震が起こりやすいかなど、地理や地政学上の説明もとりいれて解

説している。これらが、メイベルのエッセイの特徴となっているのである。

当時彼女が在住していたアマーストで、女性が主体となった活動においてリーダーシップを発揮し、講演と執筆にいそしんだメイベルだけに、日本においても女性の置かれた状況に関心を持ったことは疑う余地がない。そのメイベルが着目したのが、被災した日本女性の姿だった。大災害の中で日本女性がどのような状態に置かれているかを語るような絵を見つけたとき、メイベルはどう感じたのか。その点についてみてゆきたい。

メイベルの書いた「津波」の記事には一枚だけ津波の挿絵が挿入されている。その津波絵には「日本の雑誌に描かれた大津波」(“The Great Tidal Wave Portrayed in a Native Magazine”)の一言しか説明がないものの、先に触れた災害下の日本人に関する美談以上に、この一枚が読者に与えるインパクトは大きい。メイベルが、船中この絵を目にしたとき、自分の記事の挿絵として使用したいと思うほどの衝撃を受けたのだろう。では、なぜ、このような絵が描かれ、どうしてその絵が雑誌に掲載されていたのかなど、メイベルが着目して、自著に取り込んだ絵画の背景について触れる。

まず、メイベルが船中で目にした雑誌とは、博文館の『文藝倶楽部』の臨時増刊号であり、「海嘯義捐特集号」と題して、1896年(明治29)7月25日に発行されたものであることがわかった。明治三陸大津波の災禍は、多くの作家や画家のテーマとなったが、中でもこの「海嘯義捐特集号」の出版には、小説家であり、『文藝倶楽部』の編集者だった大橋乙羽(1869-1901)が関わった。大橋は、津波で被災した人々への義援金を集めるために、「海嘯義捐特集号」の出版を計画し、流派を超えて当時人気の作家や画家たちに寄稿を呼びかけたのである。突然の呼びかけであり、締め切りまでの時間も短かったものの、多くがこの企画に賛同し、協力を惜しまなかった。題材は自由だったが、作家も画家も大半が津波をモチーフにしたものを制作したのである。

では、メイベルは、なぜこの絵に拘ったのか。ならびに、どのような絵

だったのか。この絵の作者は、小林清親(1847-1915、明治の浮世絵師、錦絵師)であり、絵につけられた日本語のタイトルは「変 倏忽(しゆくこつ) 起る 相救ふに遑(いとま)あらず」というものだった。実際の絵は、後ろから押し寄せる大津波が、今にも人々を飲み込むかのように迫る中、一人の男が母親らしき老婆を背負って走っており、その男の妻と思われる女が子供をおぶって、前を走る男の裾にしがみ付こうとしている姿を描いたものである。迫りくる大津波の中にはすでに飲み込まれたと想像される人間の顔が散見される。

メイベルは、本文中この絵について、「日本で老人が受けている無償の愛と尊敬はこのような挿絵によく表れている。日本の挿絵は、両親を救うのか妻子を優先するのか、即座に決断できない男を描いている。男は象徴的に母を背負い、安全な場所に行こうとしている。子を背負った妻は夫を追いかけて、無駄であってもその足にすがろうとしている⁵⁾」と説明している。津波がせまるという非常時に、日本人が妻子よりも親を優先するところに、欧米との決定的な価値観の相違を見たのであろう。日本の価値観を紹介するには、津波という非常事態を背景にしたこの絵こそ、恰好の材料となったことが推察される。

「アイヌ」関連の記事について

メイベルが来日中に行うべきこととして意図していたのは、すでに述べたように、アイヌ部落の訪問であった。『皆既日食とコロネット号』の25章から28章は、北海道についてのエッセイだが、中でもアイヌに関するものが多くを占めている。先にも述べた通り、モーアの依頼を受けていたメイベルは、北海道に到着するや、早速その目的のために活動を始めたのだった。

枝幸に向かう途中立ち寄った札幌では、札幌農学校ゆかりの新渡戸稲造と宮部金吾の訪問を受けた。また新渡戸に案内されて札幌を回り、アイヌ

文化関係の品々を購入することが出来たことを述べている。特に、そう簡単には手に入らないと考えられたアイヌの人々にとって貴重なものまで、手にすることが出来たのだった⁶⁾。バードの訪問時と同様に、メイベルの場合も、アメリカの皆既日食観測隊の家族ということで、行く先々で便宜が図られたことがわかる。

二日間の札幌滞在の後、小樽より特別に出してもらった船で、宗谷岬を回り、8月9日の観測日前の到着(8月5日)が可能になったのだった。今度の船旅は、北海道の西側を北上する航路のため、サケ漁で人口が増える増毛、また、利尻島の鴛泊や礼文島の香深にも立ち寄っている。増毛では、停泊中の限られた時間ながら、郊外のアイヌ部落を訪問している。

ピアノ教師をしたことのあるメイベルだけに、香深で聞いた苦力が歌う労働歌のメロディを書き取り、西洋の楽器で演奏するのは難しいとしたものの、アイヌの労働歌は曲想が西洋人の耳にも心地よいと述べる。『皆既日食とコロネット号』の日本編には、「君が代」から始まり、香深の苦力の歌など、メイベルが採取したいくつかの歌のメロディが楽譜で掲載されている。西洋音楽以外は音楽でないとするような偏見はなく、むしろ日本のメロディのユニークさに惹かれていてと感じられるのである⁷⁾。

メイベルが着目したアイヌの生活で、バードと共通するのは、「義経信仰」と「女性の地位の低さ」であった。バードは平取のアイヌ部落にある義経神社そのものを描き、自分も参詣した。一方、メイベルは北海道に逃れた義経が、アイヌ部落でかくまわれ、隠れていたとされる箱が現在も残っていると述べている。また、義経を描いた掛物があり、それが祭りの際に使用されているとも記している⁸⁾。

アイヌの女性の地位に関しては、バードだけでなくメイベルもその低さが気になったのである。メイベルは、男性に虐待されて、神に救いを求めることもできず、自殺した女性の話などを伝えている。バードに比べるとメイベルのエッセイは量的に多くないが、彼女の関心が歴史や文学である

ことから、アイヌの神話や伝説などの紹介に紙面が多く割かれている。

アイヌ文化そのものについては、文明化の波に押されて、失われようとしていることを危惧する発言をしている。毒矢や入れ墨が旧弊として禁止され、開発が進行する中で熊の数が減少傾向にあることにふれ、それまで特徴的であったものが失われてゆくと、その伝統文化もまた消失するのではないかというのが彼女の見方である⁹⁾。途中に立ち寄ったハワイの原住民について感じた以上に、メイベルは、アイヌに対しては感傷的な感情を抱くようになっていた。その記事の中で、彼女はアイヌを「滅びゆく民」としている。同様の気持ちを吐露するメイベルの書簡も残っている。それは、宿泊した小樽の旅館、越中屋より、南部出身の作家ジョージ・ワシントン・ケーブル(George Washington Cable, 1844-1925)に宛てたものであった¹⁰⁾。

ちなみに、ニューオーリンズで、ラフカディオ・ハーン(Lafcadio Hearn, 1850-1904)とも交流があったケーブルは、前半生を過ごしたニューオーリンズで、北軍が撤退したあと黒人差別が復活したことを批判したことから、それに反発する白人からの脅威を感じて、1885年には北部にその活動拠点を移していた。1896年当時は、マサチューセッツ州ノーサンプトン在住であり、メイベルとは家族ぐるみで交流があったことが知られる。メイベルはケーブルが発行していた雑誌に寄稿し、またその妻とは社会活動を共に行う間柄だった。

ここで紹介するのは、メイベルがケーブルに宛てて小樽の旅館でしたためた8月2日付の書簡である。その中で、枝幸まで残すところあと200マイルに来ているとしたうえで、アイヌについてはその歴史と特徴に非常に興味を抱いていると述べている。珍しい容貌の民であり、「急速に絶滅しようとしている」(fast dying out)といった説明をしているのである。黒人差別に抗議したことが原因で、故郷のニューオーリンズを追われたケーブルだけに、メイベルの少数民族に対する意見には、いろいろ考えさせられたことだろう。

メイベルはバードと違い、布教をしようとか、アイヌの民をどうこうするといった意図はない。ただ、一旅行者として、自分の観察した人々についての情報を発信するにとどまっているものの、容貌においては日本とアイヌの両特徴を持ち、学生服をまとったアイヌの少年が、父親がアイヌ語で話しかけると日本語交じりの言葉で対応する様子に、やり切れないものを感じたという。また別の個所では、日本の学校教育を受けた青年とその父親のあいだに断絶が生じているとして、学校教育は同化教育であり、日本文化への同化が進むと、アイヌ部落の年長者とは分かり合えなくなることを懸念する¹¹⁾。

帰国後、メイベルはアイヌ文化を体験した人として、雑誌に記事を書くだけでなく、何度か講演に呼ばれたとのことである。当時は北海道北部を訪れることが非常に困難であったことから実際に見聞した経験を持つ人はまれであった。また日本人の名士の口利きがあったとはいえ、限られた時間の中で労を惜みず、また臆することなく、アイヌの人々と接触したメイベルの行動力には驚かざるをえない。メイベルが集めたアイヌ関係の品々は、モースとの関係からマサチューセッツ州セイラムのピーボディ博物館に収められた。それ以外のメイベルが手元に残したものは現在ではイエール大学、ならびにアマーストの歴史協会などに保存されている。

おわりに

メイベルの来日の足跡は、北海道の枝幸町に残っている。冒頭でも述べたように、トッド夫妻の寄贈した書籍をもとに、北海道で初めてという公立図書館がオホーツク海に面したこの地に開設されたのである。あいにく1940年(昭和15)5月11日の大火で、この図書館も焼失してしまったが、トッド夫妻が揮毫した詩が書かれた掛け軸だけは、焼失を免れ、現在、枝幸町のオホーツク・ミュージアムに残っている。

掛け軸は、エミリー・ディキンソンの詩を、オホーツク海に面した枝幸

カッコ内の番号は、タイトルがないエミリーの詩を識別するために編集者によってつけられた番号)

メイベルが二度目の来日を果たした 1896 年は、メイベルの活動に転機が訪れた年であることを、一人娘のミリセント (Millicent Todd Bingham, 1881-1968) が自著の *Mabel Loomis Todd: Her Contributions to the Town of Amherst* (1935) で述べている¹²⁾。1896 年は日本訪問だけでなく、エミリーの詩集の第 3 シリーズが出た年でもあった。ミリセントは、これを「メイベルの活動の分水嶺」と呼び、それ以降、メイベルの関心が、芸術、文学、科学、公共の福祉の分野で高まり、アマースト内に限られていた講演活動が外にまで広がるにつれ、外から著名な人々がメイベルの招待に応じてアマーストを訪れるようになったとも述べている。

日本への拘りという点から見ると、50 名もの著名人を招待した 1899 年 5 月 13 日のパーティの、招待客の中には名高い教育者の津田梅子もいたとミリセントは語る¹³⁾。ちなみにメイベル自身も、『皆既日食とコロネット号』の序文の謝辞で、梅子の名前をあげている。本文でも華族女学校の説明とともに、梅子については、25 年以上前に女子留学生として渡米したこと、ならびにプリン・マー・カレッジの卒業生であることを含めた紹介をし、メイベル自身がワシントンで子供のときの梅子に会った印象などに触れている¹⁴⁾。女性の社会参画という点で、先頭に立って活動してきたメイベルだけに、女子教育に尽力する梅子は遅い存在として映ったことだろう。

1896 年の日本での出来事は、娘のミリセントの弁を待つまでもなく、メイベルの心に深く刻まれたのだった。ちなみに晩年メイベルが過ごしたフロリダのココナッツ・グローヴの家は日本語で「まつば」と名付けられていたという。交際したオースティン・ディキンソンの住んでいた家が「エヴァーグリーン」と呼ばれており、「エヴァーグリーン」を日本語にす

ると「まつば」となるからだともいわれるが、「日本」がいかなる形にせよ、メイベルの心の中に長く存在し続けていたことは間違いないだろう。

【注】

- 1) 枝幸町教育委員会編『星霜』（枝幸町立図書館百周年記念誌，2004）の第1章（公立図書館設立の経緯）
- 2) 書籍 Dobrow, Julie, *After Emily: Two Remarkable Women and the Legacy of America's Greatest Poet* (NY & London: Norton & Co., 2018). Gordon, Lyndall, *Lives like Loaded Guns: Emily Dickinson and Her Family's Feuds* (Penguin Books, 2011). 記事 Dobrow, Julie, "Mabel Loomis Todd: The Civic Impulses and Civic Engagement of an Accidental Activist," *Historical Journal of Massachusetts* Vol.45 No.2 Summer, 2017. なおこれらの書籍より早くに、メイベルとオースティン・ディキンソンが交わした書簡集が出版されている。Longworth, Polly, *Austin and Mabel: The Amherst Affair and Love Letters of Austin Dickinson and Mabel Loomis Todd* (Amherst Univ. Press, 1984).
- 3) Bingham, Millicent Todd, *Ancestors' Brocades* (NY & Boston: Harper & Brothers, 1945). メイベルの娘のミリセントによる家族の物語であり、メイベル側の視点で、どのようにして問題の訴訟が起こり、どのように争われたかが述べられている。ジョージ・ワシントン・ケイブル夫人なども裁判を傍聴し、メイベルを励ましたとのことである。
- 4) 村上は、いくつかの学校で教鞭をとっており、その一つに同志社女学校もあった。『同志社女学校期報』44号（大正8）に寄せた恩師追悼文の中で、村上自身が自分の半生を語っている。村上について書かれたものとしては、高畠孝宗・山浦清「メイベルトッドの見た百年前の枝幸」（『枝幸研究』2号，2010），福井崇時「資料集成 第七高等学校造士館の村上春太郎先生」（中部大学紀要『アリーナ』15号，2013）などがある。
- 5) Todd, Mabel L., *Corona and Coronet: Being a Narrative of the Amherst Eclipse Expedition to Japan, in Mr. James's Schooner-Yacht Coronet, to Observe the Sun's Total Obscuration 9th August, 1896* (Boston & NY: Houghton Mifflin, 1898) 248.
- 6) *Corona and Coronet*, 259, 312.
- 7) *Corona and Coronet*, 270-71.
- 8) *Corona and Coronet*, 299-300.
- 9) *Corona and Coronet*, 260.
- 10) ニューオーリンズのテュレイン大学所蔵のジョージ・ワシントン・ケイブル

にまつわる資料（書簡、記事等）

- 11) *Corona and Coronet*, 260, 295.
- 12) Bingham, Millicent Todd, *Mabel Loomis Todd: Her Contributions to the Town of Amherst* (私家版, 1935) 30. この書籍のもとになったのは Mary Mattoon Chapter, Daughters of the American Revolution (DAR) の設立 40 周年記念の祝賀会で, 1934 年 11 月 1 日にミリセントが行ったスピーチであった。DAR の分科会 (Mary Mattoon Chapter) はメイベルが力を入れていた活動の一つ。なお, メイベルがアメリカに持ち帰ったものについては, アイヌの品々以外にも京都で購入した仏像などがあり, 極めつけは人力車であったと述べている。27.
- 13) 津田梅子は, 1898 年 6 月にコロラド州のデンバーで行われた女性会議に出席後, 11 月にはニューヨークからロンドンに赴く。日本政府からの奨学金で 1899 年 9 月までの休暇を得ており, 英国の学校視察を行った。1899 年の 4 月末にはロンドンからアメリカに戻ってきており, 7 月初めまでアメリカに滞在して, 開校する津田塾への支援を求めて多くの人々に会っていた。メイベル宅のパーティに参加したのはその間の出来事と考えられる。(ed. by Fukui, Yoshiko et al., *The Attic Letters: Ume Tsuda's Correspondence to Her American Mother* (NY & Tokyo: Weatherhill, 1991) 338, 346-47.
- 14) *Corona and Coronet*, 176.